

[保存版]

愛犬と私たちの 防災ハンドブック

阪神・淡路大震災から20年、東日本大震災から4年。

災害大国として知られる日本においても、

未曾有の災害に何度もさらされた20年でした。

いま、ペットの救援活動や避難態勢も大きく変わっています。

9月は防災月間。今年も防災についてしっかりと考えたいと思います。



【総監修】林 良博

はやし・よしひろ●東京大学農学部卒業。ハーバード大学客員研究員、コーネル大学客員助教授などを経て、東京大学教授。農学部長併任、理事・副学長、東京農業大学教授を務める。現在は、国立科学博物館館長のほか、(財)山階鳥類研究所所長を務めている。

協力：芳賀晶子 イラスト：フジサワミカ

1995年 阪神・淡路大震災



都市型地震で飼い主とはぐれたペットも多かったが、すぐに救援活動が開始された。避難所でのペットの受け入れ態勢が大きな話題に。がれきの下から助け出された女性の心を励ましたのがれきの上で鳴いていた愛犬だったという、心温まる出来事もあった。

1991年 雲仙普賢岳火砕流



人の救済だけが優先され、ペットの被災や救済についてはほとんど話題にも上らなかった。

愛犬の命を守るために、 今、考えておきたいこと

地震、津波、台風、洪水、土砂崩れ……、常にさまざまな自然災害の脅威にさらされている災害大国、日本。愛犬を守るために何が一番大切な、国立科学博物館の林良博館長とともに考えてみました。

2011年 東日本大震災



すぐに救援活動が始まったが、地震、津波、原発事故による被害が広域にわたったため、広域災害時の救援の難しさが表面化した。ペットと同居できる避難所もあらわれたが、原発地域に残された動物の救済や野生化は大きな問題にもなった。

ペットの救援活動が一気に高まった阪神・淡路大震災

本年は、阪神・淡路大震災から20年目という節目の年ではありますが、ペットも一緒に救済するという動物救済の考えが社会的にも認知されるようになったという意味でも、阪神・淡路大震災は印象深いものです。

この大震災以前は、被災したペットをどうするかについて話題になることはほとんどなく、一部の愛犬家などが個人的に活動する程度でした。

阪神・淡路大震災ではペット関連業界などの動きも早く、ペットフードやケージなどのペット用救援物資もいち早く届けられました。また、兵庫県と神戸市によって設立された動物救援センターでは、飼い主とはぐれたペットを保護して新しい里親を見つける活動が続けられ、ほぼ1年後にはすべての動物に里親を見つけてその活動を終えることができました。

「愛犬の命は飼い主を守る」場合によっては自宅避難も

平成25年9月1日から施行されている「改正動物愛護管理法」では、都道府県が策定する動物愛護管理推進計画に、災害時の対応について記載することとされています。しかし、動物の



苦しいときを支える動物の力

介護施設などに犬などを連れていくと、入所している人に笑顔などのよい影響があらわれるといったニュースを耳にする。苦しいとき、つらいとき、人は動物とふれあうことで癒される。阪神・淡路大震災時、東日本大震災の際も、ペットと一緒に避難所では笑顔が多くみられたという報告があった。

また、災害時のペットの救護について、環境省は「飼い主の責任によるペットとの同行避難」を原則として打ち出している。動物の同行避難は人も動物もともに助かることが主旨となっているが、今後はそれをもう一步進めたいものだ。ペットと一緒に避難することによって、長期にわたる避難生活の精神的・肉体的ストレスが緩和される、ということが社会的に認められるようになってほしい。

自宅で避難するという選択



自宅避難も選択肢のひとつに

限られた空間で大勢の人が寝起きする避難所生活は、愛犬にとっても、飼い主自身にとっても大きなストレスになるもの。自宅が倒壊や火災などの被害に遭っていない場合は、自宅避難も選択肢の一つに入れよう。そのためにも、出入り口付近やベッドの近くには倒れてくるような家具を置かないなどの自宅の防災化が大切になる。

避難所を設置するなどの実際の対応をするのは市区町村といった自治体であり、実際問題として、地域によってはかなりの差が生じることが予想されます。

たとえば、東京都では直下型地震が起きた場合のことを想定していますが、各自治体に登録されている犬の頭数を考えると、すべてのペットを収容できるような避難所の設置は不可能ではないかと言われています。つまり、「同行避難だから大丈夫」「役所が何とかしてくれる」とは限らないのです。

そこで大切になってくるのが、「自分の愛犬は自分で守る」という意識です。自宅が無事だった場合は、愛犬と自宅で待機するというのも一つの方法です。大勢の人や犬猫がいる避難所で過ごすよりも、自宅で過ごすほうが人も犬も精神的に落ち着きます。

ただし、避難所には防災拠点としての役割もあります。救援物資や情報が集まるのも避難所ですから、避難所とは必ず連絡を取り、家族や愛犬の避難場所などを報告しておく必要があります。

阪神・淡路大震災のときも、東日本大震災のような広域な災害の際も、長期間食糧物が届かなくて困ったという報告はほとんどありませんでした。何日かは不自由でも、比較的早い時期にさまざまな救援物資が届けられています。

犬は人よりもずっと我慢強い動物ですが、人と違って状況を理解できず、そのために強い不安を感じてしまいます。しかし、そのようなときでも飼い主と一緒にいれば安心します。愛犬を守ってあげることができるのは、飼い主なのです。

人はただちに行動できない

目の前で異常事態が起きていても、ほとんどの人は、すぐには危険性に気づきません。煙が迫ってきていても、逃げなければいけないほどの異常だとはわからず、逃げるという行動を起こすまで、ある程度の時間がかかります。



災害時の行動心理を知って、 防災に役立てる

協力・吉川肇子（慶応義塾大学商学部教授）

災害時、人はどのような行動を取りがちなのでしょうか。自分が取りやすい行動を知っておくことは、防災を考える上で必要なことです。社会心理学の面から防災教育に携わる吉川肇子先生に、非常時の行動についてお聞きしました。

「今が危険かどうか、
判断するのは難しい」

大きな災害が起きて逃げ遅れた人がいると、なぜすぐに逃げなかつたのだろうという疑問が生じることがあります。しかし、たとえば今、火災報知機が鳴ったとしたら、どのくらいの人が逃げ出すでしょうか。多くの人はしばらく様子を見るのではないのでしょうか。このように、何らかの異常が起きてもそれを異常事態だと思わず、通常と同じだと判断してしまうことを「正常化バイアス（正常化の偏見）」といいます。こうした心理が起きる理由として、「自分が危険な状態にあるという心理的負担に耐えられないから」「情報を良いほうに割り引いて考えるから」などがあります。

たとえば火災報知機が鳴った場合は、

機器トラブルなどで警報器が鳴っていると情報を割り引いて考え、そのまま様子を見ようとするでしょう。

しかし、これが本当の火事だったらどうでしょうか。様子を見ようとしたことで逃げ遅れてしまつかも知れません。防災を考える上で大切なことは、「目の前で異常事態が起きても、普通は逃げ出すまでに時間がかかる」ということを知っておくことです。いつもと違うことが起きて自分が危ないか危なくないかわからないときでも、この正常化バイアスを思い出すことで、他の人よりも先に危険性に気づくことができます。

「いざというときに、
人は、普段やっている
ことしかできない」

緊張したり興奮したりする場面では、「人は普段やっていることをする」もの

パニックは起こりにくい

突然の災害というと、「パニックが起きる」と考える人が多いのではないだろうか。「パニック」はギリシャ神話に登場する半獣神パンに由来する言葉で、世界大百科事典によると「危険からの無目的な逃走」を指します。

事故や災害時に問題になるのは「脱出パニック」といわれるものですが、現実的に脱出パニックが起きるのは、①生存の危機がある、②生存できる可能性がある、③脱出口が限られている、④時間が切迫している、という4つの条件がすべて重なったときです。しかし、この4条件が重なることは極めてまれで、実はパニックは起こりにくいのです。

問題はパニックを恐れる心理です。「パニックが起きる」と思い込んで恐れる心理が我れ先にとという心理を生み、本物のパニックを引き起こしてしまうのです。

建物の建築基準などもしっかりしており、すべての人が短時間に逃げ出せるように設計されていますから、落ち着いて行動することが大切です。



人はつられる

人はつられて動く動物。大勢の人がある方向に向かってると、つられて同じ方向に向かってしまうが、その方向が間違っていたらとんでもないことに……。



地域ごとに避難場所が決められていますが、そこにどう行けばよいか、避難路を知っているだけでは十分ではありません。なじみがない道では、いざというときに足が向かないのです。大切なことは、あわてているときでも自然と足がその道に向かうように、普段からその道を通り慣れていることなのです。

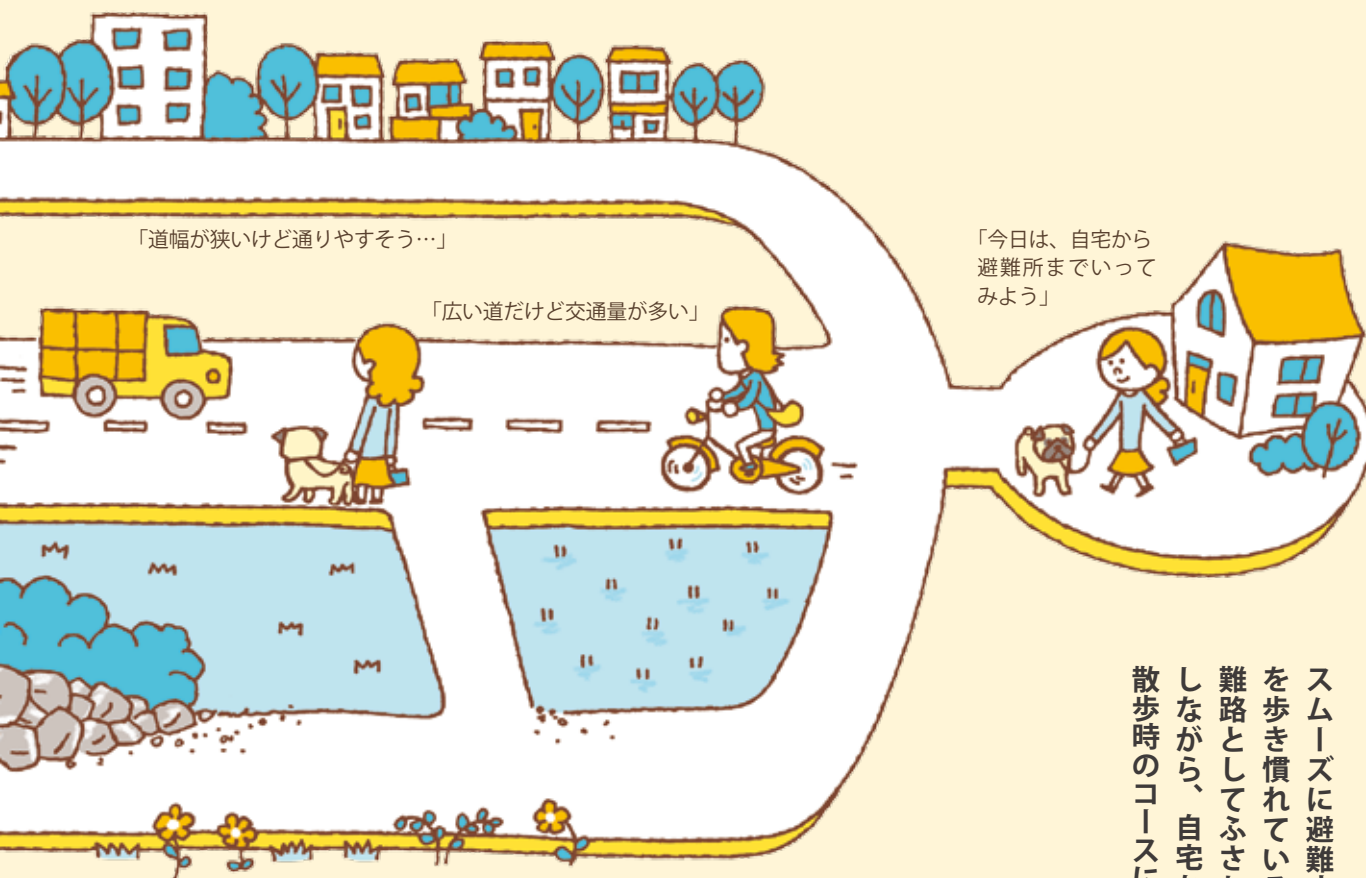
です。これを心理学で「優勢反応の理論」といいます。「優勢反応」とは最も多く行っている行動のことで、ほかの行動に比べてその行動が「優勢だ」ということです。たとえばスポーツ選手は何度も何度も同じ技を練習しますが、成功を重ねることでその技が優勢反応になり、緊張が高まる大きな大会でも成功できるようなのです。この優勢反応の理論を防災に当てはめて考えてみましょう。たとえば何らかの異変に気づいて逃げようとするとき、人は普段から歩き慣れている道を通って逃げようとして、その道を通ることが優勢反応だからです。

大勢の方が亡くなられたビル火災で難を逃れたある女性は、ダイエットのために普段から非常階段を使っており、その階段を下りて無事に逃げることでできたということです。足が自然とその道に向かうように、普段から避難路を使っておくことが大切だといえるでしょう。

「人は、ほかの人の動きにつられて動く」

人は同調しやすいものです。誰かが空を見上げてみると、「何があるんだろう」とつられて空を見上げます。一般的に、3人が同時に同じことをすると、つられて同じことをする人の数が一気に増えることが実験で知られています。災害などが起きてどこかに逃げなくてはいい場合、逃げていく方向が正しいかどうかはわからないものです。先頭を走っている人が正しい避難路を知っていればいいのですが、必ずしもそうではありません。自分が正しい避難路を知っていれば、ほかの人が逆方向に逃げていても、自信を持って正しい方向に逃げるすることができます。そしてそういう行動を見せれば、ほかの人もつられて自分と同じ避難路を選び、多くの人が助かることになりま

自分で守る——私と愛犬のための避難訓練



「今日は、自宅から避難所までいってみよう」

「広い道だけど交通量が多い」

「道幅が狭いけど通りやすそう…」

スムーズに避難するためには、避難路を歩き慣れていることが大切です。避難路としてふさわしい道かどうか確認しながら、自宅から避難所までの道を散歩時のコースに取り入れましょう。

避難経路を散歩コースに取り入れて道に慣れる

自宅に倒壊や延焼の危険性があつたり、風水害による避難勧告が出ていたりする場合は、すぐに安全な場所に避難しなければなりません。通つたことのない道では戸惑つてしまいます。あわてていても避難所まですみやかに行くことができるよう、普段から愛犬との散歩コースに避難経路を取り入れるとよいでしょう。

また、通勤や通学では近道を利用しがちですが、近道は道が細かったり、複雑に入り組んでいたりがちが多いためです。そのような道は、災害時、通れなくなることがあります。時間に余裕があるときには大きな通りも歩き、



夜間、散歩中に車に追突される事故を防ぐため、光るアームバンドをつけたり、犬の首輪やリードが光るものに変えたりすることで、未然に事故を回避することも防災につながります。

いざというときに戸惑わないように備えることも大切です。

危険箇所や、給水・配給拠点、トイレなどの場所も確認しておく

毎日通る道も、避難路だと意識して歩くことで気がつくことがあります。たとえばブロック塀のある道は、地震の際、ブロックが崩れて通れなくなる可能性があります。大雨の際、冠水する可能性がある場所はないでしょうか。土砂崩れが起きそうな道はないでしょうか。途中で階段や急な坂道がある場合、迂回するほうがよいこともあるでしょう。避難ルートにそういった危険箇所がないか、確認しましょう。

避難路のほか、自宅近くの給水・配給拠点や、公衆トイレ・マンホール

いつもの散歩道で防災

愛犬との散歩は避難訓練に最適。災害時、通れなくなりそうな道はないか、避難所までどのくらいの時間がかかるか、給水ポイントやトイレはどこにあるかなど、確認しながら歩いてみましょう。



「避難所に指定されている小学校へ到着」



「給水所のある公園」

「大通りに出るのわ」

「道幅も広く交通量も少ないけど道がデコボコしている」

キーポイント

何も持っていない場合、何分ぐらいかかるか計ってみる。



赤ちゃん連れ、お年寄り、犬連れの場合も計っておこう。



スマートフォンを使いながらの場合は速度が遅くなる。



一人で歩いて避難所に行く場合と、犬を連れていく場合では時間のかかり方も変わってきます。普段から、どのくらいの時間がかかるのか、計っておきましょう。

避難場所を確認しておこう

地域によって呼び方が異なる場合もあるが、避難場所にはいろいろな種類がある。どんなときにどこに避難すればよいのか、必ず確認しておこう。なお、地域によっては地震や風水害などの災害の種類によって避難場所が異なる場合もある。

●一時集合所（一時避難所、指定緊急避難場所など）

家の倒壊や火災、風水害などで避難勧告が出

たなど、自宅にいるのが危険な場合は、学校や公園などの一時集合所に避難する。

●広域避難所

大規模な火災などの危険から避難する場所。大きな公園や広場などが広域避難所で、一時集合所から移動する場合もある。

●指定避難所

倒壊や延焼などで自宅に戻ることができない場合に滞在する場所。

イレ、公衆電話・特設公衆電話などの場所も把握しておくようにしましょう。

避難所まで何分かかるか歩いて計ってみよう

避難所までの距離は同じでも、家族

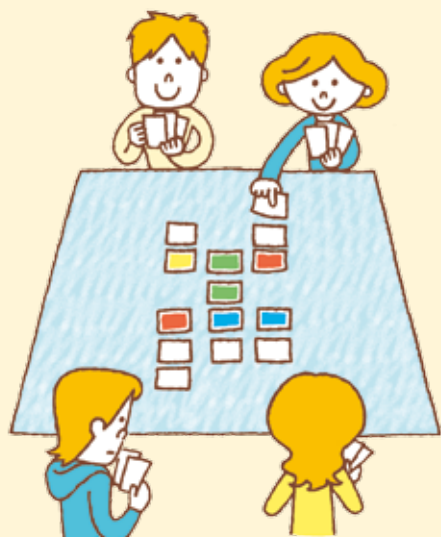
構成や状況によってかかる移動時間は異なります。
たとえば犬連れ、高齢者、赤ちゃんや幼児などの家族がいる場合、ひとりで避難する場合とどのくらい違うか、実際に歩いて計ってみましょう。その違いを把握しておくことは大切です。

体験して守る

体験すること、
訓練することが大切

「防災」というと、まじめな顔をして取り組まなければならないと考えている人は多いのではないだろうか。学校の避難訓練でも、少しでもおしゃべりしたりしたらだらだら歩いていたりすると、「そこまじめに！」などという声が飛んできたりします。

しかし、6ページで紹介した心理学の「優勢反応の理論」に従うと、おしゃべりしながらでも、だらだら歩いてでも、



ゲームで防災

内閣府防災情報ページで紹介されている「クロスロード」ゲームは災害対応カードゲーム教材として開発されました。いろいろな災害状況についてイエス・ノーで答え、参加者同士が回答に対して意見交換を行いながら進めていきます。そのほかにも、すごろく形式のものや、幼児向けのものなどもありますので、インターネットで調べてみるとよいでしょう。

「防災」にはさまざまな取り組み方があります。楽しくゲームしながら防災について学んだり体験したりすることができるともあります。犬のしつけ同様、生活の中に取り入れて続けることが大切です。

「避難路となつている道を実際に歩く」ことが大切なのです。確かに、知らない道やあまり通らない道よりも、普段からよく歩いている道を通って逃げるほうが確実に避難所まで行きやすいことは明らかです。

「百聞は一見に如かず」ということわざがありますが、現在、「体験学習」の重要性が指摘されています。体験学習には「体験・観察・概念化・試行」という4つの段階があり、最初の4段階を経て新たな4段階へと移り、循環的な過程を繰り返しながらいろいろな学習していくというものです。

- ①体験・実際に体験をする
 - ②観察・体験した内容を振り返る
 - ③概念化・観察したことを教訓にしたり一般化したりする
 - ④試行・概念化したことを試す
- 新たな①→④を繰り返す

4ページで紹介しているペットの救援活動も、災害という体験をもとにこれまで行われてきたさまざまな取り組みが元になつていきます。

ゲームをしながら「防災」について学ぶ

ゲームには、自分で体験していないことでも体験しているつもりになつて考えたり試したりできるというおもしろさがあります。将棋やチェスも、ゲームは自分が主体的に参加して何かをしていかないと進んでいきませんが、防災でもこうした姿勢が求められます。

防災についてもゲームが開発されています。「こういうときはどう対処すればいいか」「自分がこう動いたら状況はどう変わるか」など、想像力を働かせて考えながら進めていくゲームもあれば、知らず知らずのうちに防災についての

知識を身につけられるゲームなどもあります。

何回でもトライできることがゲームのよさです。1度失敗しても、次はここをこうしてみようと挑戦すれば、2回目には1回目よりはうまくできるはず。ご家族でゲームをしながら防災訓練をしてみましょう。

愛犬のしつけも防災訓練も毎日の生活の中で一緒に行う

犬のしつけや訓練は毎日行うことが大切ですが、防災訓練も同じです。普段やっていないことは、いざというとき役に立ちません。特別なイベントとして防災訓練を行うのではなく、ふだんの生活の中に防災訓練的なことを取り入れるようにしましょう。

散歩で避難ルートを歩いたり、キャンプという名の防災訓練をしたりという方法だけでなく、犬仲間と防災について話してみたり、地域のイベントに愛犬連れで参加したりすることも役立ちます。「今地震が起きたら……」と考えて、自分の力で行動できることから始めてみましょう。



地域の防災訓練に参加

地域の防災訓練には積極的に参加するようにし、特に犬連れの防災訓練があれば参加しましょう。愛犬と一緒に参加することで、愛犬のことを知ってもらうことができますし、「犬の社会化」を兼ねたしつけもできます。しっかりとしつけされていることを理解してもらえるように努めましょう。



ドッグスポーツで防災

アジリティやフライボールなどの競技会場では、出場者や犬は車やテントで待機しますが、そのようなときも防災訓練のチャンス。いつもと違う環境、知らない人や犬が大勢いる中でも、リラックスしたり、飼い主の指示にきちんと従えるように慣らしていきましょう。

アウトドアで防災

人気のバーベキューやキャンプなどのアウトドアライフに慣れておくと、災害時も心強いものです。とくに多頭飼育、大型の犬を飼っている場合は、避難所に一緒に入れるとは限りません。どんなところでも眠ることができ、食事ができ、排泄ができるよう、慣らしておきましょう。テントと避難用品をまとめてそろえておくと、いざというときに役立ちます。



防災に役立つ愛犬トレーニング

協力・内田恵子（ACプラザ荻谷動物病院統括院長）

「津波が迫っているのに、逃げ回るばかりで、いくら呼んでも来ない。愛犬をつかまえられなくて、本当に怖い思いをした」。東日本大震災の折、実際にあった証言です。いざというときに困らないよう、しつけと絆作りはしっかりとっておきたいもの。心の通じ合う飼い主と共にいる安心感は、犬のストレスを軽減し、ストレスからくる体調不良やむだ吠えも防ぎます。

そこで、防災に役立つ以下の7項目をご紹介します。いつもやっている通りに行動できたら、災害時にどんなにか役立つことでしょう。犬と防災訓練ごっこをするつもりで、日ごろからたくさん練習してほめてあげること、指示があれば反射的にできるよつになります。



呼んですぐ来る犬に

普段はあわてて大声で愛犬を呼ぶことはしないと思いますが、毎日の食事や散歩の時間の前などにわざと大声で犬の名前を呼び、手元に来たら優しくほめるという練習をしてみましょう。声の大きさやあわて加減を変え、「早くおいで!!」などとあわてた声で呼んだときは大好物を与えるなどの工夫をするのも効果的です。いざというとき、飼い主の元に大急ぎで駆け寄るようになるでしょう。



そばでおとなしくできる犬に

災害時は避難所や野外にとどまっていなければならない状況もあります。そのようなとき、愛犬がそばで落ち着いて過ごすことができれば、愛犬も飼い主とともに安心できます。飼い主がそばにいるという安心感は、愛犬のストレス緩和にもつながります。



トイレの一言で排泄できる犬に

外でしか排泄しない犬、トイレシートの上でしか排泄しない犬は、災害時、犬自身も飼い主もとても困ってしまいます。土の上でも、新聞紙の上でも、「トイレ」という指示で決められた場所に排泄できるようにしつけておくことはとても大切です。



スワレの一言に反応する犬に

「オスワリ」の声に反射的に従うようにしつけておくと、犬をいろいろな危険から守ることができます。危険な方向に走っていきそうになったり、怖がってやみくもに走り回ったりしているときでも、「オスワリ!」の一声でハッと我に返して暴走を止めることができます。災害時だけでなく、道路に飛び出すことを防ぐなど、日常の危険からも守ることができます。

人間社会を怖がらない犬に

消防車や救急車の音、他人の話し声、大勢の人、赤ちゃんの泣き声、白衣の人、杖をつく人、車いすの人などに接したとき、愛犬は吠えたりしないでしょうか。平常時ならそういう場面を避けることでトラブルを防止できますが、避難所ではそういうわけにはいきません。犬の吠え声はまわりの人にとって大きなストレスになりますから、むだ吠えをする場合は、自宅避難に切り替えることが必要になります。

犬が吠えたり咬んだりする行動の原因は、ほとんどの場合、社会化不足です。不慣れた物事に対して、犬自身もストレスを感じるためです。犬

のストレスを軽減

するためにも、小さいときから『社会化』を行い、いろいろなものに慣らしておくことが大切です。苦手なことに慣らす方法は、下の『★苦手を克服するには』をご覧ください。



ハウスと言われたら、素直に入る犬に

犬にとっていつも寝ているハウスの中ほど落ち着く場所はありませんが、災害時は避難所にある段ボール箱や、動物救護所のクレートの中で過ごす必要が出てくることもあります。このようなときも安心して寝られるよう、「ハウス」と言われたら素直に従うようにトレーニングをしておきましょう。犬はもともと狭いところが好きですから、場所が変わっても入ることができれば、すぐに落ち着きを取り戻し、ストレスが和らぎます。



犬用パンツ、服、靴に慣れた犬に

ドッグカフェや旅行、散歩などの外出時、オス犬にはマーキング防止のためのマナーベルト、メス犬の発情期にはパンツ、おしゃれのためには洋服も欠かせない、という方は多いと思いますが、これらの着用は犬と一緒に避難生活でも役立ちます。避難所の中でトラブルになりやすいのが犬の排泄や抜け毛ですが、マナーウェアなどの犬用パンツをはかせれば粗相しませんし、服を着用させることで抜け毛も防ぐことができ、まわりからの理解も得やすくなります。犬が小さいときから慣れていれば、ストレスを感じる事が少なくなります。

靴も、ガレキの中を歩く際のケガ防止に役立ちます。とくに抱きかかえて避難できないような大型の犬にはよいでしょう。



★苦手を克服するには

苦手なものに接近するときは、吠える前からおやつを与えて苦手なものから気をそらすようにしましょう。苦手なもの目の前にあっても、吠えないでいればほめられ、おやつをもらえるということがわかってくれば、苦手だったものに対してもよい印象を持つようになり、徐々にストレスと感じなくなります。



★おやつを使ったトレーニングのコツ

教え始めの頃は、指示に従った直後に毎回おやつなどのごほうびを与えるようにします。指示を聞いて犬がすぐ反応するようになれば、指示の意味を理解し始めた証拠ですから、次第におやつを与える回数を減らしていきます。従ったときに言葉だけでほめ、おやつは毎回ではなく、3回に1回、5回に1回、10回に1回というようにしますが、このとき、いつおやつが出るかわからないようにするのがコツです。とくによくできたときだけ、大好物のごほうびを出すように

しましょう。犬はあなたがおやつを持っていることを知っています。ポーチやポケットにおやつを入れたまま、あなたの判断で出したり出さなかったりすることが大切なのです。

なお、おやつは、毎回は与えませんが、指示に従うことができたときは、必ず毎回ほめてあげることが大切です。「いい子だね」「そうだよ」などの『ほめ言葉』で心からほめることは忘れてはいけません。

愛犬を守る

— 迷子防止策と応急処置

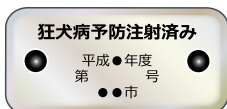
大震災が起こった場合、多くの犬が迷子になる可能性があります。愛犬と離れても会えるよう準備をしておきましょう。愛犬の情報をまとめて記入したエマーゼンシーカードも用意しておくことと安心です。

愛犬を迷子にしない

これまでの災害でも多くの犬が迷子になりました。飼い主と会えるまで、犬は極度の不安状態に置かれます。愛犬と少しでも早く会えるよう、いくつかの方法を併用して愛犬の身を守りたいものです。

●狂犬病予防注射済票

避難所や動物救護所では、狂犬病の予防注射を受けていることがはっきりとわからない犬は基本的に受け入れてもらえません。鑑札や迷子札とともに、狂犬病予防注射済票を愛犬の首輪などにつけておくようにしましょう。狂犬病予防注射は生後3カ月以上のすべての犬に法律で義務付けられています。



●マイクロチップ

身元証明に使えるデータをマイクロチップに登録し、動物の体に埋め込みます。専用のリーダーで読み取れば、飼い主がすぐわかります。マイクロチップは一度入れておけば、とれてしまう心配がなく、動物の健康にも悪影響を与えず、世界中で広く使われています。



●犬鑑札・迷子札

犬鑑札は登録番号によって飼い主を明確にするもので、常に犬の体につけておくことが法律で義務付けられています。しかし、災害時は犬鑑札だけで飼い主を特定することは難しくなりますから、飼い主の連絡先を書いた迷子札もつけておくほうが安心です。



覚えておきたい応急処置 災害時は思わぬケガをするものです。病院に運ぶまで、応急処置をしておくことが大切です。

骨折しているときは



足を骨折しているときは、痛みをやわらげるために、骨折部位が動かないようにしっかりと固定しましょう。雑誌や段ボール紙などを足に巻き、



テープなどでぐるぐる巻いて固定します。

出血が止まらないときは



足からの出血の場合は、心臓に近い部分を布やひもなどで巻き、血を止めます。釘などが深く刺さっている場合は、刺さっているものを抜かず布などで固定して病院などに運びます。



おなかや頭などを負傷した場合、布などでおさえます。交換するときに激しく出血することがありますので、交換しないで上から布を足します。また、止血に使った布は捨てずに病院に持っていけば一目で出血量がわかります。

やけどをしたら



流水でよく洗い、冷やしたら、

ラップやビニールなどの表面がつるつるしているもので傷口を覆います。傷口を覆うと痛みがやわらぎます。

布などで覆うと傷口にくっついてしまい、あとからはがすのが大変になります。

●エマージェンシーカード

エマージェンシーカードは、災害時に動物救護所のケアを受けるときや、愛犬が迷子になったときに、愛犬を探すためのカードです。必要事項を書いて持ち歩けば、いざというときに役に立ちます。

<p>ワクチン接種記録</p> <p>狂犬病予防注射 <input type="checkbox"/> 接種済み</p> <p>犬鑑札番号 _____</p> <p>混合ワクチン注射 <input type="checkbox"/> 接種済み</p> <p>ワクチンの種類 _____ 種</p> <p>血統証明書 <input type="checkbox"/> JKC登録済み</p> <p>登録番号 _____</p> <p>マイクログリップ <input type="checkbox"/> 登録済み</p> <p>登録番号 _____</p> <p>かかりつけ動物病院名 _____</p> <p>電話 _____</p>	<p>エマージェンシーカード</p> <p>ペット防災用 健康記録カード</p> <p>犬</p> <p>呼び名 _____</p> <p>飼い主名 _____</p> <p>JAPAN KENNEL CLUB</p> <p>一般社団法人 ジャパンケネルクラブ</p>
<p>病気の記録</p> <p>病名 _____ <input type="checkbox"/> 治療中 <input type="checkbox"/> 完治</p> <p>病名 _____ <input type="checkbox"/> 治療中 <input type="checkbox"/> 完治</p> <p>病名 _____ <input type="checkbox"/> 治療中 <input type="checkbox"/> 完治</p> <p>病名 _____ <input type="checkbox"/> 治療中 <input type="checkbox"/> 完治</p>	<p>犬種 _____</p> <p>性別 <input type="checkbox"/> オス <input type="checkbox"/> メス <input type="checkbox"/> 去勢・避妊済み</p> <p>誕生日 _____ 年 _____ 月 _____ 日</p> <p>住所 _____</p> <p>飼い主情報</p> <p>電話 _____</p>
<p><すりの記録</p> <p>投薬名 _____</p> <p>投薬名 _____</p> <p>投薬名 _____</p> <p>投薬名 _____</p>	<p>犬の特徴</p> <p>性格 _____</p> <p>好き _____</p> <p>嫌い _____</p> <p>しつけ</p> <p>「 _____ 」の言葉でハウスに入ります。</p> <p>「 _____ 」の言葉で排泄します。</p> <p>「 _____ 」の言葉で手元まで来ます。</p> <p>「 _____ 」の言葉で座ります。</p> <p>この他、犬を扱う上で注意すべきこと _____</p> <p>咬むこと <input type="checkbox"/> あり <input type="checkbox"/> なし</p>

※愛犬が迷子になった場合に備えて、こちらのカードも用意しましょう。

<p>迷い犬 探しています</p> <p>写真をお貼りください。</p> <p>この犬を見つけたら、下記までご連絡ください。</p> <p>呼び名 _____ 性別 _____</p> <p>犬種 _____</p> <p>年齢 _____ 才 _____</p> <p>電話 1 _____</p> <p>電話 2 _____</p> <p>★メモ _____</p> <p>飼い主名 _____</p>	<p>迷い犬 探しています</p> <p>写真をお貼りください。</p> <p>この犬を見つけたら、下記までご連絡ください。</p> <p>呼び名 _____ 性別 _____</p> <p>犬種 _____</p> <p>年齢 _____ 才 _____</p> <p>電話 1 _____</p> <p>電話 2 _____</p> <p>★メモ _____</p> <p>飼い主名 _____</p>
--	--

A4サイズに拡大コピーし、折りたたんで携帯すると便利です。



●ジャパンケネルクラブのホームページ (<http://www.jkc.or.jp/>) からPDFデータがダウンロードできますので、ご利用ください。